



第2回 伊丹市 未来デザインワークショップの記録

伊丹市ブランドコンセプト策定プロジェクト

～「何屋さん？」から紐解く、伊丹の未来デザイン～

第2回伊丹市未来デザインワークショップ

「伊丹の魅力ってなんだろう？」
自分たちのまちを見つめ直した
第1回ワークショップを経て、
7月20日、第2回となる
「未来デザインワークショップ」が
開催されました。

集まったのは、中高校生から
一般公募の市民、
地元企業・団体の皆さん、
そして市職員まで総勢53名
(参加者52名+オブザーバー1名)。





第2回のテーマは、
視点を一步広げて
「市民は、いま
何を求めているのか？」
という問いに
向き合うことでした。

開会にあたり、
市長の中田より参加者へ、
ひとつの問いかけが
なされました。



伊丹の魅力を
お料理やさんに例えるなら、
『中華もうまい』『和食もいい』
『カレーも美味しい』状態。
どれも美味しいのに
『何屋さんかわからない』。
これは課題だと感じています。

〇〇なら伊丹と、
看板が明確であることが大切です。
今日は皆さんにとっての伊丹の
『美味しい素材(強み・価値)』を
どんどん出し合ってください。



世の中が求めていることは何だろう？伊丹を選んでもらうべき真の顧客は誰なのか？

課題から目を逸らさず議論することで、私たちの愛する伊丹の魅力が浮かび上がってきました。

3つのワーク

【ワーク1】世の中が抱えている課題は？

【ワーク2】伊丹市がもっとも憧れられるポイントは何か？

【ワーク3】こんな伊丹市にしたい！創りたい！

【ワーク1】世の中でいま、何が起きている？(世の中の課題/NEEDS)

最初のワークでは、「いま世の中が抱えている課題や時代の要請」について話し合いました。10のテーブルからは、現代社会が抱えるリアルな生きづらさや不安が次々と吐露されました。

「気を使いすぎて自分を出せない」「ネットでは不寛容なのに、リアルでは無関心になっている」。課題を解きほぐす中で、「だからこそ、心の通う人間関係や安心できる場所が求められているのでは」という共通認識が芽生えていきました。



- 深刻な人口問題と環境問題:**
少子高齢化、働き手の不足、地球温暖化、異常気象
- デジタル・情報社会の光と影:**
SNSでの批判やバッシング、情報過多、AIへの依存、リアルな人間関係の希薄化
- 経済・生活の不透明感:**
物価高騰、低賃金、将来や年金への不安
- 「個」の時代の孤立:**
ご近所付き合いの減少、気使いすぎによる生きづらさ、不寛容な空気
- 子ども・子育て環境の変化:**
子育てと仕事の両立の難しさ、子供の居場所や個性の尊重

【ワーク2】世の中から見ても、伊丹が「最も憧れられるポイント」は？

世の中の課題(NEEDS)を踏まえた上で、
「そんな時代だからこそ、伊丹市が世界や外から
最も憧れられるポイントは何か？」を議論しました。



● 圧倒的な「暮らしやすさ」と「安心感」

・コンパクト&平坦なまち：
都市機能が凝縮し、坂道が少なく自転車でどこへでも行ける快適さ

・絶妙なアクセス性：
大阪・神戸へすぐ、空港や新幹線も近い「日本・世界とつながる街」

・盤石な防災性：
山や海がなく、津波や土砂崩れの災害リスクが極めて低い安心感

● 日常に息づく「人とのつながり」と「歴史・文化・自然」

・人とのつながり：
誰かのために行動できる人が多い、良い人が多い

・清酒発祥の地・文化財：
有岡城跡や酒蔵のある街並み、日常に溶け込む歴史

・豊かな公共・文化施設：
昆陽池公園、昆虫館、ことば蔵、プラネタリウムなど、身近に本物と
触れ合える環境

【ワーク2/フォーカス】都会にはない「顔の見える繋がり」と「あたたかい市民力」

ワーク2の議論で最も熱を帯びたのは、**「便利さ以上に人の温かさや関係性」**でした。

「伊丹市はおっとりのどかな雰囲気があるのに、作っているアウトプット(お酒、盆踊り、市章の歴史など)が全国レベルではないか？ じゃばらない謙虚さも含めて、他にはない深い魅力だと感じる」



●約束しなくても会えるまち(夏祭り・盆踊り)

「昨日、昆陽野の夏祭りに行ったら、約束もしていないのに会いたい人にほぼ全員会えた。『顔が見える関係』がまちの中に残っている」

●「おかえり」と声がかかる安心感

「小中学生の登下校中、地域のお年寄りが『おかえり』と声をかけてくれる。この温かい繋がりこそが伊丹の宝物」

●恩返しの循環が生み出す「市民力」

「子育て中に地域に助けられたから、今度は自分が次の世代を支えたい。」そんな相互扶助の精神が、市民主体のイベント(バルやグリーンジャム、盆踊り)を支えている

●伊丹市にとって祭りとは「エネルギー」

「コロナ禍など不測の事態もあったが、市内各小学校区単位で夏祭りが長きにわたって継続している。これ自体が伊丹の高い市民力そのもの」

【ワーク3】私たちが創りたい「理想の伊丹市」とは？

世の中の課題と伊丹の強みを掛け合わせ、
「私たちが創りたい理想の伊丹の未来」を
10グループそれぞれが描き出しました。

- 一人一人に寄り添った心理的安全性が高いまち
あえて過度な特化をせず、何でも揃って心がホッとする
「サードプレイスのような街」「お菓子で言えばビスコ、スーパーで言えば関西スーパーのような愛される存在」というユニークな例えも飛び出しました
- 挑戦と個性を応援し、多世代が交わるまち
子どもから高齢者まで一人ひとりに「色(個性)」があり、新しい挑戦や起業を街全体で温かく後押しする空気
- 一度出ても、誰しものが「帰ってきたくなる」まち
「どこに行っても、やっぱり伊丹が一番落ち着く」と思える、深い地元愛と居場所があるまち
- 若者が自分らしく活躍できるまち
子どもがイベントの運営などに関われるまち
誰もひとりぼっちにしない、いじめのないまち



【ワーク3/エピソード】挑戦を後押しするまち・命が輝くまち

グループ発表では、
立場を超えた情熱的な未来像が語られました。

●【起業を目指す参加者の声】

「若い起業家への支援が充実すれば、税収も雇用も増えて良い循環が生まれます。伊丹には『どんどん挑戦しなさい、責任は僕が持つから』と言ってくれる市長がいる。この挑戦を応援してくれる風土を、もっと伸ばしていきたい」

●【こどもホスピス設立を目指す参加者の声】

「病気や障害のある子どもたちが、家族と普通に過ごせて笑顔になれる『命が輝く場所』を伊丹につくりたい。活動を始めて知ったのは、伊丹の人たちが本当に親身になって協力してくれる温かさでした。伊丹を誰もが安心して『帰りたい』と思えるまちにしたい」



見えてきた「伊丹市があるべき姿」。
2日間にわたるワークショップを通じて、
バラバラだった無数の付箋が、
ひとつの大きなストーリーへと繋がり始めました。
「ちょうどいい」を極めた、最高の暮らしやすさ。
お節介で温かい「顔の見えるコミュニティ」と「市民力」。
日常に溶け込む「歴史・文化」と「挑戦を育む風土」。
これらは単なる「便利なベッドタウン」という言葉では
括りきれない、伊丹独自の体温をもった価値です。



中田市長コメント

皆さん、お疲れ様でした。約3時間にわたるワークショップということで、いかがだったでしょうか。

私自身は、まず皆様が本当に思うところを目の前の付箋にいっぱい発信していただいて、ワークの時もそれぞれの意見を引き出そうと話し合いを進めていただいたことに感謝を申し上げたいと思います。意見の違いで「どうなんだろう」と思うところもあったはずですが、一切この場では否定的な話にならず、むしろ相手の思いを引き出すような話し合いを進めていただけました。

最後も今まで発表したことのない方が発表されたり、中高生がしっかり手を挙げて発表してくださったり、「自分の意見を言いたい」という溢れる思いがしっかり出てきた、そんな3時間・第2回のワークになったのではないかと考えています。

最初に「何屋さんかな」と申し上げました。中華が良いのか、和食が良いのか、美味しいイタリアンが良いのか。どのような看板(のれん)を掲げるかはこれから色々考えていくところもありますが、選択肢としてフードコートのような形もあるんですね。好きな店をみんなが選べる、もしかしたらそういう伊丹の良さもあるかもしれない。色々な切り口でのれんを掲げられる伊丹市になれるのではないかと、今日皆様からいただいた要素をしっかりと引き出させていただけたらと思っています。

最終的には、私は昔NHK教育テレビの『たんけんぼくのまち』が好きだったのですが(チョーさんが街を探検して15分で地図にまとめる番組です)、それを思い出しながら、皆様のワーク一つ一つを頭の中で絵を描くような気持ちで見せていただいていたと思います。

今日のこの機会はすごく良い形で、皆様一人ひとりのビジョンに確実に繋がっていくと思いますので、要素をお出しいただいたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

